

1 日 目

第3・4学年3組 道徳学習指導案

平成27年2月5日(木) 公開授業Ⅱ
 平成27年2月6日(金) 公開授業Ⅰ
 会場 2階-④
 授業者 教諭 剣 仁美

1 主題名 **こんなときどうする？ - 2-(2)思いやり・親切 -** **「せきがあいているのに」一部改作(出典:『新しい道徳4』光村図書出版)**

2 本主題の価値

本主題は、学習指導要領第3学年及び第4学年の内容2-(2)に準拠して設定したものである。

【中心となる価値項目】 2-(2) 相手のことを思いやり、進んで親切にする。

低学年では、自分を中心として人間関係を築いていた子どもも、中学年になると徐々に「相手はどのように思っているだろう」と相手の立場に立って物事を考えることができるようになってくる。そこで、この時期に相手に対する思いやりの気持ちについて考えさせたい。副読本では、年間を通して思いやり・親切についての授業が設定されている。副読本の資料を通して、子どもの思いやり・親切という道徳的価値(人間らしいよさ)の自覚を深め、道徳性(人間らしい心)を育成することがねらいとされている。

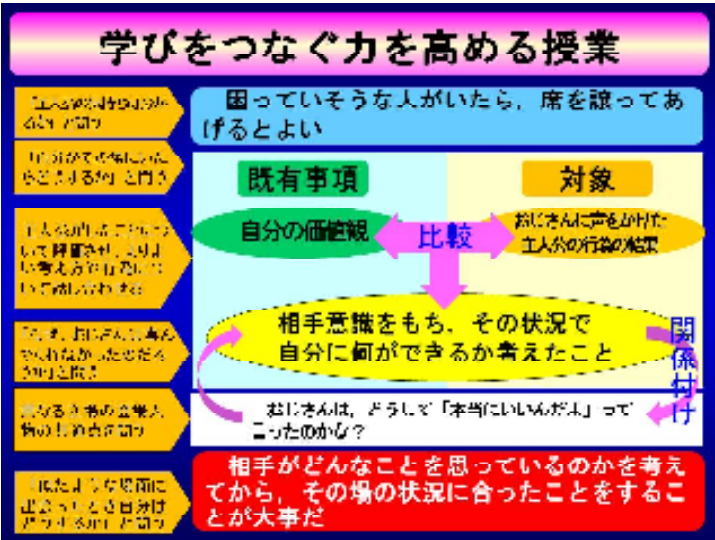
多くの子どもは、思いやり・親切について具体的な行動を次のようにとらえている。バスなどでお年寄りや乗ってきたら「席を譲ってあげる」、荷物を重そうに持っている人には「声を掛けて助けてあげる」などである。これは、自分が考える相手がしてほしいことである。しかし、子どもに気付かせたい本当の思いやり・親切は、単に相手に優しい言葉を掛けたり、一方的な思い込みで親切にしたりするのではなく「常に相手の状況を考え、相手の状況に合った行為をしようとする事」である。本資料を通して、子どもがもっている思いやり・親切の他にも、“相手意識の強い”思いやり・親切もあることに気付かせたいと考える。

これまで、「心と心のあく手」(私たちの道徳)を資料として、思いやり・親切についての学習をした。この学習を通して、子どもは、思いやり・親切を次のようにとらえた。

・おばあさんのことを思いそつと後について行った主人公は偉い。
 ・「お手伝いすることはありませんか」と一声掛けてあげることもできたんじゃないかな。
 ↓
 親切は、自分が勝手に決めることではない。おばあさんのことを思ってどうするかを考えることが大切だ。

このような子どもが、本資料の問題場面では「目の不自由な人には、席を譲ってあげることがよい」という価値観を表出する。そして、解決場面での主人公の行為に対して、相手のことを考えながらその場の状況に合った行為を考えていく。さらに、目の不自由な人の「ドアの近くに立っていれば、自分の力で降りられるんだ」という言葉から、相手の事情や気持ちを考えていく。「助ける側」「助けられる側」という立場を視点にしながら、取る行為は異なっても思いは共通していることに気づき、“相手意識の強い”思いやり・親切を理解していく。

3 本主題で学びをつなぐ力を高めた姿と学びをつなぐ力



本主題で学びをつなぐ力を高めた姿は、**よりよい行為を見いだす子ども**である。具体的には、「目が不自由な人が困っているのだと思ったときには、席を譲ってあげるとよい」という価値観が高まり、「相手がどんなことを思っているのかを考えてから、その場の状況に合ったことをすることが大事だ」などと、強い相手意識をもち、置かれた状況の中で自分はどうするかを判断することができる姿である。

目指す子どもの姿となるためには、子どもがもっているそれぞれの思いやり・親切の価値観を表出させることが大切となる。そのために、価値観表出の場面では「これまでの経験」とかかわらせながら、資料の場面に浸らせる時間を十分に取る。そして、資料の解決場面の主人公が取った行為を知り、**比較するすべ**を用いて、資料の解決場面と自分の価値観とを比べ、主人公の行為を共感的、あるいは批判的に見て考えたことを述べる。

主人公の行為を全体で検討させることで、自分とは異なる価値観に触れ、「どれもいい。だったら、もっとよい方法はないのか」と考え始める。また、終末で「普段の生活に似たような場面に出会ったとき、自分はどうするか」と問うことで、子どもは、**関係付けるすべ**を用いて、自分の価値観と検討で触れた価値観とを想起し、相手意識をもち(本資料では「おじさん」)、この状況の中で

自分はどうするかを判断する。この一連の学習において発揮している力が、学びをつなぐ力である。

○「**中核的な知識や技能**」 道徳的価値のよさの実感や価値観の高まりの自覚

○「**対象**」 解決場面における主人公の行為

○**学びをつなぐ力**

関係付けるすべを用いて、自分の置かれている状況や相手の気持ちを考えた上で、資料の場面に合ったよりよい行為を判断する力

○**考え方の自覚**

主人公の行為の善し悪しの検討で、友達との価値観に触れ、自分の価値観が高まったという自覚

4 指導の構想

子どもは、自分の生活経験から様々な価値観をもっており、それぞれの生活経験や生育環境などで異なる。

働き掛け1(1日目)

資料の問題場面を提示し、「主人公の気持ちは分かるか」と問う。

価値観を表出させるための働き掛けである。資料Aを提示し、レゴブロックで状況の再現をしながら読み聞かせる。レゴブロックで状況を再現することで、子どもは資料の場面を空間として把握することができる。これにより、主人公だけでなくその場にいる登場人物の置かれている状況を学級全体で共有することができる。資料Aでは、子どもが生活の中で経験したことがあるような場面を設定する。そこで「主人公の気持ちは分かるか」と問うことで、子どもは、自分の経験を基に「主人公の気持ちが何となく分かる気がする」と考える。このような子どもに、ハートの付箋を配付し「そのときの主人公の気持ち」を記述させる。このとき、子どもは主人公になりきったり、自分と主人公をかかわらせたりして「席を譲ってあげたい」などの気持ちを記述する。

働き掛け2(1日目)

このような状況の中で、「自分がその場にいたらどうするか」と問う。

資料場面と自分とをかかわらせるための働き掛けである。「席を譲ってあげることがよいことだ」と考えている子どもに、「その場にいたらどうするか」と問い、ワークシートに記述させる。子どもは、「声をかける。立っているのが大変そう。助けてあげたいから」など、自分がするであろう行為と理由を記述する。そして、行為と理由を学級全体で共有させる。

働き掛け3(1日目)

資料Bを提示し、主人公がしたことについて評価させ、よりよい考え方や行為について話し合わせる。

よりよい行為に何が足りないのかを検討させるための働き掛けである。「自分だったら」と考えている子どもに資料Bを提示する。そして、「主人公がしたことをどう思うか」と問う。子どもは、**比較するすべ**を用いて、資料の解決場面と、自分の価値観とを比べ主人公の行為を共感的、あるいは批判的に見て考えたことを述べる。このとき、主人公が取った行為に対して評価させ、自分の考えと理由を記述させる。記述した考えを、学級で共有させる。子どもは、自分とは異なる友達との価値観に触れ、これまでとは違う価値観があることに気付く。さらに、資料Cを提示することで、子どもが気付いた価値観とのずれが生じ、「なぜ、おじさんは本当にこのままでいいのだろうか」と問いをもつ。

働き掛け4(2日目)

前時の問いを確認し、「なぜ、おじさんは喜んでくれなかったのだろうか」と問う。

主人公の思いや願いとおじさんの思いがずれた理由を追及させるための働き掛けである。おじさんが取った行為に疑問を感じている子どもに「なぜ、おじさんは喜んでくれなかったのだろうか」と問う。子どもは、目の不自由なおじさんの思いや願いに着目し、「何か理由があったのではないか」と考え始める。このような子どもに、資料Dを提示する。子どもは、おじさんの思いを知り、おじさんの気持ちを考える。このとき、ハートの付箋を配付し気持ちを記述させる。

働き掛け5(2日目)

異なる立場の登場人物の共通点を問い、思いやり・親切についての道徳的価値に気付かせる。

異なる立場や異なる行為を取っている人でも、互いに思いやっている(思いやりについての道徳的価値)ことに気付かせるための働き掛けである。主人公とおじさん、それぞれの気持ちや事情を考えた子どもに「二人に、つながるところはあるのか」と問う。子どもは、互いの共通点を探し始める。主人公は「おじさんを気に掛け席を譲ろうとした」、おじさんは「ありがとうと主人公を気遣った」などから、互いに思い合っている、互いに優しさがあるという共通点に気付く。これが、相手意識の強い思いやり・親切である。

働き掛け6(2日目)

「普段の生活の中で、似たような場面に出会ったとき自分はどうするか」と問い、その理由を記述させる。

価値観の変容を自覚させるための働き掛けである。主人公とおじさんは互いに思い合っていることに気付いた子どもに、「似たような場面に出会ったとき、自分はどうするか」と問う。子どもは、**関係付けるすべ**を用いて、自分の価値観と、相手が置かれている状況や立場から行為を判断し、「相手がどんなことを思っているのかを考えてから、その場の状況に合ったことをすることが大事だ」と、相手意識をもちその状況の中で自分はどうするかを考える。このとき、1時間目にもった最初の価値観が記述されている隣の欄に記述させることで、自分の価値観の変容を自覚させる。